

岩波  
講座

日本文学史 第十五卷 近代

# 漱石

猪野謙二

岩波書店

漱

石  
—  
そ  
の  
序  
章  
—

猪  
野  
謙  
二



漱石が江戸の草分名主のひとつといわれる夏目家の五男末子として、牛込馬場下に生まれたのは慶応三年（一八六七）の正月五日、明治改元の前年で、尾崎紅葉、山田美妙、幸田露伴も同年の生まれであった。明治十七年（一八八四）大学予備門に入学したが、美妙は同級、紅葉や川上眉山、石橋思案らは一年以上級であった。しかし、かれが不覚の落第を経験し、さらに当初の建築家志望を同級の友人米山保三郎の勧めによって翻意、第一高等中学校（十九年に予備門を改称）本科英文学一年に進学した明治二十一年には、紅葉らの硯友社はその「我楽多文庫」をも公売とし、ようやく明治新文壇の主流にのしあがろうとしていた。漱石は「其頃は小説を書かうなどとは夢にも思つてゐなかつたが、なかに己だつてあれ位のもはすぐ書けるよといふ調子だつた」（『僕の昔』明治四十年）という。

漱石の兄たちや従兄にも江戸っ子らしい通人や道楽者が多く、「全体にソワ／＼と八笑人か七変人のより合ひの宅見たよに、一日芝居の仮声を遣ふやつもあれば、素人落語ばなしもやるといふ有様だ」（『僕の昔』）というが、初期の作品ことに「吾輩は猫である」などには、この「花暦八笑人」や「妙竹林七偏人」などから伝来の、洒落や地口が縦横に活躍しているのはいまさらいうまでもない。しかし、同時代に生をうけながら、早くから文学に志して伝統の文士氣質を身につけた紅葉らとは異って、かれは、江戸戯作文学の伝統からは、おのずからその本質において自由であり得た。またその反面、馬琴流の勸善懲惡の否定と、「人情」「世態風俗」の「模写」を中心とする坪内逍遙（安政六年—昭和三年）（一八五九—一九三五）の小説改良（『小説神髓』明治十八年）からの影響も、それほど素朴な、直接的なものではなかったわけである。

「倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なものは必ず倫理的なり。」（『断片』大正五年）という信条に生きた漱石の文学は、むしろ逍遙が単純に否定し去った小説における倫理性ないしは功利性を、そのまったくあらたな次元において恢復しようとするものであったともいえる。また、正宗白鳥は「虞美人草」について、あの煩瑣な「物知り」ぶりや、「どのページにも頑張つてゐる理窟」を、「近代化した馬琴」ということばで評しているが（『作家論』1所収創

元選書昭和十六年)、その該博な知識や知的な構成力をたよりに、いわば自己の觀念や思想の肉化を通じて人間のタイプを形づくってゆこうとするこの作品などは、ある意味ではまさしく馬琴の「近代化」であつたともいえるだろう。その文飾修辭のわずらわしさ、勸善懲惡的な構成は、まだ余りにも古くさく、前近代だ。しかし、すくなくともその作品は、逍遙の素朴写真論をわるくうけついで硯友社作家のように、決して京伝の「近代化」あるいは「洋装せる元禄文学」(国木田独步「紅葉山人」といった風俗小説にはならなかった。漱石の文学は、通常の文学史に「反自然主義」という項目で分類されてきたが、かれの対立者はむしろ、「小説神髓」に始まる日本の写実主義の無思想性そのものであつたとみるのが妥当であらう。

漱石が文学について本当に考えはじめたのは、やはり明治二十二年のはじめ、正岡子規(慶応三年—明治三五年  
一八六七—一九〇二)との交友がはじまつた頃からだろう。その年末に子規に宛てた次の書簡には、当時の新文学に対する批判とともに、文学に対するかれの基本的な概念が明らかにされている。

今世の小説家を以て自称する輩は少しも「オリザナル」の思想なく只文字の末をのみ研鑽批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をきせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模様仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の価値はと問はゞ三文にも当せず其思想はと問はゞ一顧の価なきのみならず鼻をつまんで却走せざるを得ざる者のみの様に被思候……小生の考にては文壇に立て赤幟を翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熟し腹に満ちたる上は直ちに筆を揮つて其思ふ所を叙し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法杯は次の次の其次に考ふべき事にて Idea itself の価値を増減スル程の事無之様に被存候

その頃子規は幸田露伴に私淑し、まだ小説家志望を捨てていなかったが、かれはそうした子規の創作、一路をさえぎ

るかたちで、さらに次のような忠告に及んでいるのである。

御前の如く朝から晩まで書き続けにては此 *idea* を養ふ余地なからんかと掛念仕るゝ勿論書くのが楽なら無理によせと申訳にはあらねど毎日毎晩書てく書き続けたりとて子供の手習と同じにて此の *original idea* が草紙の中から霊現する訳にもあるまじ……伏して願はくは……御前少しく手習をやめて余暇を以て読書に力を費し給へよ

二葉亭四迷（元治元年—明治四二年）が「浮雲」第三篇の稿半ばにして筆を投じ、「われ今までは藥袋もなき小説を油汗にひたりにて書き来りしが是より將た如何になすべき」とその日記に記したのも、ちょうどこの二十二年のことであった。「文章の美、章句の法」にのみ浮身をやつす職人的な作家修業のむなしさをいい、「思想」——*idea* を第一とするかれらが、ここにひとしく当時の流行文学への懷疑を吐露し、文学とは何かの問題をその根本から問おうとし、あるいは問いなおそうとしているのは決して偶然ではない。

ところで、漱石のいう「読書」の対象が主として英文学の書物を指すものであったことは、前記の引用文が「此休みには『カーライル』の論文一冊を読みたり二三日前より『アルノルド』の『リテレチュア、エンド、ドクマ』と申者を読みかけたり」というような部分にただちに続いているところからも明らかだが、二葉亭、漱石の「思想」がそれぞれロシア文学、英文学をその培養基としていることはすでに周知の通りである。しかしここで、かれらが当時文壇文学の戯作性や無思想性に反撥したその根底には、その幼少時に養われた漢学あるいは儒学からの根強い影響、すなわち前代における士大夫文学、知識階級文学の伝統があったのを見落すことはできないと思う。

逍遙の「小説神髓」は、これら支配層の文学としての漢詩文の下風に立ち、徹底してその非政治性、没理想性を余儀なくされてきた町人文学、戯作の改良をその基本的な方向とするものであった。硯友社の作家たちが、もっぱら新しい「世態風俗」の平面的な描出や、皮相な人間心理の類型的な描きわけに甘んじ、そのアルチザン的な文章の鍊磨、

趣向の工夫にのみ浮身をやつすに至ったのは、この意味でも決して故ないことではない。ところが二葉亭や漱石の場合、このような新文壇の動向に乗ずるためには、よかれ悪しかれ、その士大夫文学・知識人文学の伝統があまりにも鞏固でありすぎた。そうした伝統に根ざす国家社会への使命感、それと相表裏する知識階級としての自負と一種の優越意識である。二葉亭が「一枝の筆を執りて国民の気質風俗志向を写し国家の大勢を描き」といい、「人の性質を写し一国の大勢を描く」「落葉のはきよせ」ことをもって小説家の任務とするとき、この発想の基礎を、たんにロシア十九世紀文学のリアリズムに帰してしまふことはできないと思う。「私は当時『正直』の二字を理想として、俯仰天地に愧ぢざる生活をしたといふ考へを有つてゐた。この『正直』なる思想は露文学から養はれた点もあるが、もつと大関係のあるのは、私が受けた儒教の感化である。」「予が半生の懺悔」——これはよく知られた二葉亭のことばだが、漱石にも共通な、この病的なほどの倫理的潔癖さも、たしかに露文学、あるいは英文学だけによって養われたものではあるまい。

これら伝統的要素の根強さは、一面において、たしかにこれらの近代性を制約するものであった。すくなくともそれは、小説というもつとも市民的な、自由な文学形式による自己表現を困難ならしめるものであった。だが同時に、そこからくる一種の矜持と廉恥とは、かれらに「小説神髓」——自然主義の「ありのまま」描写や消極的な自己証明を主とする私小説的な作風にとどまることを許さず、ひいては、それがかえって虚構による西欧小説の方法を正しく受けとめさせる素因ともなっているのではないか。

さて漱石の文学が、幼少時の漢籍や小説類の耽読に兆し、ついで学友正岡子規との深交に負うところ多く、さらにその後から始まってやがてロンドン留学をひとつの頂点とする、英文学との身を以てする対決と摂取とを通じて切りひらかれていったということは、すでに周知のことである。かれがはじめて子規に示した漢文の房総紀行「木屑録」の序には「余児時誦唐宋数千言喜作為文章」とあり、「而時勢一変余挾蟹行書上于郷校校課役不復暇講鳥迹之文」と

もある（郷校に上る」とは、大学予備門受験準備のため、明治十六年、神田駿河台の成立学会に於てはじめて本格的に英語を学ぶに至ったのを指すのであろう）。またその後の「文学論」（明治三十九年）の序には、「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短きにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。」とあり、ついで「ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながち悔ゆることなかるべしと。余が單身流行せざる英文学科に入りたるは、全く此幼稚にして単純なる理由に支配せられたるなり。」と記されているが、なお、さきの「木屑録」の跋に、正岡子規が次のように書いていることも注目されてよいだろう。

余は吾兄の英文に長ぜる事を知るや久しかりしも、而も吾兄の漢文を見るは即ち此の木屑録に始まる。余の吾兄と校に入るや、ともに馱舌を学び、蟹文を草す。而して吾兄は嶄然として頭角を現はし、蛮語を話すこと猶邦語の如し。然れども余以為へらく、西に長ぜる者は概ね東に短なれば、吾兄も亦まさに和漢の学を知らざる可しと。而るに今此詩文を見るに及んで、即ち吾兄の天稟の才なるを知れり。其詩文を能くするは即ち其才の用のみ。必ずしも文字の自他と学問の東西とを問はざるなり、吾兄の如きは千万人にして一人のみ。

漱石における漢学がおよそどのようなものであったかということ、またそこから英文学にはいつてゆく経緯は、以上の引用によってほぼ察せられるが、ここではじめに注目しておく必要があるのは、すでに唐木順三氏（子規と漱石）「夏目漱石」所収が指摘しているように、「蟹行書」すなわち「英文学」に對比されている「鳥迹之文」すなわち「漢籍」の内容が、右にあげた二つの文章においてやや異っているということである。すなわち、前者が「唐宋」の詩文を範とする風流韻事の文学であったとすれば、後者の「左国史漢」という史書の類と結びついていたものは、これと相表裏する倫理的もしくは文明批評的要素であったと思われる。おそらく漱石の生涯を通じて共存し、あるいは対立してゆく二つの側面がすでにここにはっきりと示されている、とみてよいだろう。ごく大まかにいって、前者は子規との出

逢いを通じてやがて俳句の世界と結びつき、その後は「草枕」が代表するような俳諧的文学もしくは低徊趣味の主張となつてあらわれるが、後者は、のちのかれ自身のことを借りれば「維新の志士の如き烈しい精神」(明治三十九年十月鈴木三重吉宛書簡)をもつてする文学であり、さらに日本近代化の特殊性にもとづく知識階級の宿命的な苦悩、その内部矛盾の倫理的な追求として、かれの長篇小説の一貫した主題と方法とに相渉つてゆく。そして晩年の「明暗」と漢詩や南画の制作との関係が、この両面の関係をそのぎりぎり結着の次元において指し示していることはのちに述べる。

とにかく、同じく前時代の知識人文学あるいは士大夫文学の流れをひきながら、終生国家枢要の位置にあった鷗外などの場合には、儒教における規範的なものへの志向が強く、それが近代的西欧的な人間主義と対立し、あるいはこれを制約してゆくのに対して、漱石のそれには「志士」的な要素とともに、むしろその反面の文人趣味あるいは老荘的隠逸への志向が際立ち、それがやがて禪的なものとも結びついていったのである。しかもそれは、普通に考えられているように、決して、たんに現実生活からの韜晦や逃避のよりどころであつたとすることはできない。漱石を目して、成島柳北や福地桜痴、あるいは幸田露伴などにつづく、明治期の「最後の文人」とする意見があるが(本講座第九巻「文人意識の成立」中村幸彦、たしかにそのような見かたも可能であろう。ことに私は、その文明批評風の戯文「柳橋新誌」がもつすぐれた諷刺的批判性において、この柳北をこそ漱石の数少ない先蹤の一つと考えたい。文人趣味とは、本来、享保期以降における徳川幕藩体制の膠着期に、もはや天下の師表として政治文教の事に参画する望みを失い、またそれを潔しとしなかつた儒学の徒が、むしろ仕官の道を自ら捨てて俗世間との交渉を絶ち、従来は第一義の「德行」に対して第二義的なものとされてきた「文芸」すなわち詩文や書画等の諸芸に遊ぶことで、自己本然の欲求を満たそうとするところに成立したものだ。そしてこの「遊於芸」が、反俗の態度を通じて、実はあくまでも自己を生かすこと、個性の伸張をめざすものであつたことはいうまでもない。たとえば天明期の代表的な文人上田秋成のように、強烈な自己意識や倫理的な潔癖をその特色とするものが多かつたゆえんで、「儒者も今の世のは文章詩作の商人で」といい、「世

をみれば酒のんで餅くふてこい茶ねぶつて風流じやと覺つた人のみ也」(「胆大小心録別本」という、この「雨月物語」の作者のことばには、ほとんど自虐に近い自反自譏の精神がこめられていたのだ。そして、「芸術は趣味の表現である」とする漱石の「余裕派文学」「俳諧的文学」の根底にも、かれの第一義とする西欧的な個人主義思想そのものが内包する矛盾、あるいはその執拗な近代的論理的追求によってもついに解決し得ぬ自己内面の暗く非合理的なもの、その個性の深淵の象徴的な表現がめざされていたのであって、「漾虚集」中の「一夜」という短篇、その後の「夢十夜」などが、風流に托してそうした深淵をのぞかせたものであることは、すでにしばしばいわれていることである。また、

真蹤<sup>ほんそう</sup>寂寞<sup>じやく</sup> 杳<sup>しょう</sup> 難<sup>なん</sup> 尋<sup>じん</sup> 欲<sup>よく</sup> 抱<sup>か</sup> 虚懷<sup>きょかい</sup> 步<sup>ふ</sup> 古今<sup>ここん</sup> 一<sup>いつ</sup> 碧水<sup>せいすい</sup> 碧山<sup>せきざん</sup> 何有<sup>なにあり</sup> 我<sup>われ</sup>

蓋天蓋地<sup>たいてんたいち</sup>は無心<sup>むしん</sup> 依稀<sup>いし</sup> 暮色<sup>ぼしき</sup> 月離<sup>げつり</sup> 草<sup>くさ</sup> 錯落<sup>さくらく</sup> 秋声<sup>しゅうせい</sup> 風在<sup>ふうざい</sup> 林<sup>りん</sup>

眼耳雙<sup>がんじしやう</sup> 忘身<sup>わうしん</sup> 亦失<sup>よくしつ</sup> 空中<sup>くうちゆう</sup> 独唱<sup>どくたう</sup> 白雲<sup>はくうん</sup> 吟<sup>ぎん</sup>

(訓点―猪野)

死の床に就く前日の作といわれるこの絶唱などには、きびしい自己苛責の究極処があまりにもなまなましく投影されており、調べ高い一篇の格調それ自体が、あの整然たる「明暗」の虚構世界を支える、まさに凄惨とも評すべきかれの内情を暗示している。これがたんに、「明暗」執筆によって「俗了」された精神を補償するための、一片の余技であつたなどと片付けることはとうていできない。むしろ、最初の――そして最後の「小説らしい小説」の完成によって作品の表面から退いたかれの我が、これらの「風流」にはじめてそのぎりぎりの発現の場を見出しているのである。そしてここにこそ、「明暗」のあの「リアリズム」の完成に、自己のすべてを托し得なかつた後進国日本の小説家漱石そのひとの宿命があつたとも考えられるわけで、これをただちに抽象的な「則天去私」の合言葉に結びつけてしまうのは、まさにひいきのひき倒しというほかはないだろう。

要するに、「左国史漢」にもとづく国士的要素においてはその文学がもつ高度な社会的、倫理的な批判性にかかわり、また反面、「唐宋」の詩文を範とする文人的要素においては、その強烈な自意識の処理を中心とする自己確認への方向

にかかわっている。これが漱石における漢学の意味であったといえるが、それは、かれの内部にようやくはぐくまれてゆく西歐的な近代思想、その個人主義的な思想と対決しつつ、実はかえってこの近代的な内容に、例の平面的な写実の技法を超えた独自の輪廓を与えているのである。

さて私はいま、西欧近代文学における文学の自律性の概念やその写実主義的方法の素朴な受容によって、戯作小説の改良への方向にはじめて日本近代小説の基礎をおいた「小説神髓」から、その後の自然主義に至る日本的写実主義文学の主流と、漱石文学との差異に触れ、そこにまず前時代の知識人文学、士大夫文学の伝統をみてきた。だがここで、維新前後に生をうけた知識階級として、漢学の洗礼をうけなかったものが果してあったか、という反論があらわれるのも当然であろう。だが重要なことは、それがどれだけ血肉化されていたかということとともに、その血肉化されたものが、強力な異質との対決に堪えることでどれだけ相対化され、またそのことでどのように実際の創造面に機能し得たかということである。そしてその点では、「小説神髓」を生んだ明治十年代までの文明開化、欧化主義全盛の時代を経て、ようやく国粹主義の気運が漲りはじめて明治二十二、三年の交にはじめて漱石文学の端緒がひらかれたということが、なかなか重要な意味をもっている。たとえば逍遙と漱石とのおよそ真反対なその資質上の差異を無視することはできないが、子規との出逢いを端緒とするかれの文学的な開眼の機会が、伝統思想と西歐的な近代思想とが真に自覚的な対決に入ろうとするこの時期においてもたれた、という事実は十分注目に値するであろう。

かつて松田道雄氏は、私が「二葉亭における志士的発想法」をあまり重視していないという点を批判したあとで次のように述べた。「やはり明治二十年代のナショナリズムの勃興ということが、志士（国士）とも同氏はいう）に方向を与えたのじゃないかと思うんです。この志士的なものが彼をして、余計者の形象として現われた文三というものを拒否せざるを得なくさせた。二葉亭の『浮雲』が明治二十二年に中絶しておるといふ時代背景には、二十年代のナシ

ヨナリズムの昂揚ということを考えないといけないと思うのです。」(『浮雲』について『文学』昭和三十四年二月) 私もまた、決して二葉亭における国士的要素を過小に見積ってはいないつもりだが、ただ松田氏にくらべて、それをややブラスへの方向において認めていたという点が異っているだろう(拙著「近代日本文学史研究」七〇ページ以降参照 昭和二十九年 未来社)。ところで漱石の場合には、この「二十年代のナシヨナリズム」との対決ということが、とりわけ、正岡子規との対決というかたちで行われた、というように考えられるのだ。

もっとも、二葉亭より三歳の年少で、それだけヨーロッパ文学との接触もおくれている漱石は、自己の気質や傾向としてはともかく、その頃まだ拒否さるべき「余計者の形象」といったものもっていなかった。幼少時からとくに興味をもって漢籍に耽り、明治十二、三年頃には三島中州の二松学舎にはいつて漢学を学んだこともあったというその半面、「英語と来たら大嫌ひで手に取るのも厭な様な気がした」というかれが、やがて「考へて見ると漢籍ばかり読んでこの文明開化の世の中に漢学者になつた処が仕方なし」というので、大学受験準備のために、十六年成立学舎に入り、それから「好な漢籍さへ一冊残らず売つて了ひ夢中になつて勉強した」(談話「落第」というのが、その英学への第一歩であった。しかし、それは必ずしも英学への第一歩ではなかった。英学への端緒は、さきにも述べた当初の建築家志望を捨てて、はっきりと英文学専攻を決意した明治二十一年(一八八八)、さらにその翌年からの子規との出逢いによって開かれる。つまり、二葉亭における挫折の時期が、ちょうどかれの文学的な発足の時期に当るわけだが、しかしこれは、たんに文学史的な時間の問題にとどまるものではない。二葉亭の「浮雲」を中断させ、その近代的個人主義的な形象の成熟を阻んだ「二十年代のナシヨナリズム」は、かれの場合には、その英文学、さらにその文学の方向を、そもそもその生い立ちにおいて規定するものとなつたのである。このことは何よりもまず、英文学研究における主体性確立のための惨澹たる努力を必至のものとした。有名な「文学論」の序にいわゆる「英文学に欺かれたるが如き不安の念」は、この点から考えても、いわばほとんど宿命的なものであったとさえいえる。そしてこのこ

とは、あくまでも「德行」を主とする学問を第一義とし、「文芸」を第二義とする根強い漢学流の文学概念と、西欧文学における文芸自律の概念、あるいはその「リアリズム」との長い孤独な葛藤を意味するものであったわけで、逍遙がすでに文明開化の潮流に乗って容易に通る過ぎ、さらに二葉亭が傷つき去ったその時点から、身を以てする漱石の苦闘が開始されるわけなのである。

さて、漱石における「ナシヨナリズム」との対決とは、とりわけ子規そのひととの対決であった、とさきに述べたが、それは具体的にはどのようなものであったのか。漱石は明治二十四年八月、子規に宛てて、「鷗外の作ほめ候とて図らずも大兄の怒りを惹き申訳も無之是も小子嗜好の下等なる故と只管慚愧致居候」と書いている。「試みに彼が作を評し候はんは結構を泰西に得思想を其学問に得行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候右等の諸分子相聚つて小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある様に思はれ候」というのが、その鷗外の小説に対する（舞姫）「うたかたの記」「文づかひ」のうちいずれか一篇を読んだ上でのかれの批評であった。この発表時の批評は、今日読んでもなかなか適評というほかないが、その好意的な鷗外評価が子規の怒りをひいたというのである。その理由は、当の子規書簡が失われているらしいこんにち、はっきりとはわからぬが、どうやら漱石の「洋文学」「心酔」ということに触れたものであるらしい。このことは、右につづく「小生自身は洋書に心酔致候心持ちはなくとも大兄より見れば左様に見えるも御尤もの事に御座候全体あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候」という一節によって察せられる。そして漱石はさらに、次のような注目さるべき告白を敢てしているのである。

日本人が自国の文学の価値を知らぬと申すも日本好きの君に面目なきのみならず日本が夫程好き者のあるを打ち棄てゝわざ／＼洋書にうつゝをぬかし候事馬鹿々々敷限りに候のみならず我等が洋文学の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勧めにまかせ邦文学研究可仕候さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけると思へば自ら面目なき迄

に愧入候性来多情の某何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段無念とは存候得共是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候御憫笑。

ここでは、「洋文学の隊長とならん」とし「天下の一人と自ら思ひ上」っていた文明開化の申し子が、子規の「ナシヨナリズム」からの横槍を契機に、いわば最初の挫折を告白していることになる。そして、この挫折を通じて、挫折を肯わぬ当時の鷗外との分岐点に立っているということもいえるだろう。また、「何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段……時勢の然らしむる所と諦め居候御憫笑。」には、のちの有名な講演「現代日本の開化」や作品「それから」において定式化される「外発的な開化」のあの深刻な実態把握と、それに対応するかれの悲劇的な姿勢が、すでにその原型において示されている、ともみられるだろう。

だがここで、子規が漱石の「洋書」に耽ることそのことを批難したとはどうしても思われない。かつて子規は、かれを目してあまりにも「漢学に熱心なる者」と速断する二三子の批評に憤激し、日本の文明を生んだ洋書の効を列挙した上で次のように書いた。「嗚呼大なるかな、洋書の功。洋書の功大なるかな噫。此の如きの功ある洋書にして若し之を読まざれば頑固とや云はん固陋とや云はん此の如きの生は実に憐むべし歎ずべし……」（明治十五年十二月三並良宛書簡）その後においても、たとえば

外国語も用ゐよ外国に行はるる文学思想も取れよと申す事に就きて日本文学を破壊する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも將たサンスクリットの詩を作るとも日本人が作りたる上は日本の文学に相違無之候。唐制に模して位階も定め服色も定め年号も定め置き唐ふりたる冠衣を著け候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英国の軍艦を買ひ独国の大砲を買ひそれで戦に勝ちたりとも運用したる人にして日本人ならば日本の勝と可申候。『七たび歌よみに与ふる書』

このような発言は随処にみられるのであって、むしろこれがかれの終生変らぬ態度だったといえるのである。なお、

子規が陸羯南の『日本』に入社したのは明治二十五年（前記漱石書簡の翌年）であるが、その『日本』における国粹主義がおおよそどのようなものであったかは、たとえざ切引り者言やこある羯南自身の次のことばなども端的に物語っている。

「日本」は国民精神の回復発揚を自任すと雖も泰西文明の善美は之を知らざるにあらず其權利自由及平等の説は之を重んじ其哲学道義の理は之を敬し其風俗慣習も或る点は之を愛し特に理学経済実業の事は最も之を欣慕す然れども之れを日本に採用するには其泰西事物の名あるを以てせずして只日本の利益及幸福に資するの實あるを以てす故に「日本」は狭隘なる攘夷論の再挙にあらず博愛の間に国民精神を回復発揚するものなり

子規を通じてかれの前に立ちあらわれた「二十年代のナショナリズム」とは、およそこのようなものであった。それはすでにいわれているように、日本が東洋の強国として國際舞台にのしあがってゆく日清戦争前後の「日本主義」——高山樗牛らのまったく排外独善の国家主義とは異って、国民の独立と自由のためには、むしろ大胆に西欧近代文化の精粹を移入すべきだという、まだかなり健全な國際主義の半面をもつものであった。またそれは、明治政府の欺瞞的な欧化主義への反撃として——つまり、その極端な中央集権がもたらす都市と農村、工業と農業、あるいは少数の「紳商」と純粹な民間資本とはなほだしい懸隔、そうした事態への下からの是正要求ないしは反撃として、相当にひろい民衆的基盤の上に立つものであった。漱石のことば（明治二十四年十一月子規宛書簡）に「社会主義は高天原連より見れば悪説なり」というのがあるが、かれらの間では、いわゆる「高天原連」の偏狭な国粹主義——平田篤胤系の神国思想とのちがいは、もとより自明のことだったのである。そして、子規本来の「農村性」（杉浦明平「正岡子規」『現代日本の作家』所収 昭和三十一年 未来社）——たとえば「兎に角我々の希望は都会の腐敗した空氣を一掃して、田舎の新鮮なる空氣を入れたのである。東京言葉と衣服の流行が分らない者は小説家の資格が無いだの、恋でなければ文学でないだの、花は重、虫は蝶、此外には詩美を持つてをる花も虫も無いだの、といふやうな、狭い幼稚な、

不健全な思想は破つてしまひたい」(『ホトトギス第四巻第一号のはじめに』明治三十三年)——こういう発想の上に立つ革新的な国民文学への展望、また、伝統的な庶民文学としての俳諧をとりあげて、これに明治の文学としての新しい創造性をふきこもうとする俳句(ついで短歌)の革新運動は、こうした「日本」派の国粹主義運動にとってまことにうってつけのものであったといえるのである。

漱石が「君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候」というその違いは、「洋文学」への評価の違いというよりも、実はむしろ、こうした子規の農村性と漱石の都会性とのちがいであったということになるのかも知れぬ。だがいずれにしても、子規のナシヨナリズムは、漱石における国士的な要素、あるいはその国民的な文学への志向を引き出しはしたが、それは決して、かれの英文学を、あるいは英文学から学んだ西欧的な近代精神を排除し去ってしまうような、偏狭なものではなかったということである。事実、さきに引用した書簡のすぐあとにも、漱石は子規の東洋的な「豪傑」論や「気節」論を駁して次のように述べている。

君此書「明治豪傑譚」という書を当時子規は漱石に贈った。を読んで自ら思へらく日本男子の区域外に放逐せられて饕餮飽くなきの蛮夷と伍するに至らざるを喜ぶなりと然れども君の目して蛮夷となすもの饕餮飽くなきの輩となすもの実に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一点の節操あらしめば其節操の一半は駄舌の書中より脱化し来つて余が脳中にあり此脳中にあるの秤量を以て此書の貫目をはかるに其軽き事秋毫の如し。

また、子規が、工商の子弟は士家の子弟に気節その他の点で劣るという意味のことをいったらしいのに対して、その非を詰り

兎に角気節の有無は教育次第にて工商の子なりとて相応の教育を為し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんと覺えず(中略)試みに士家の子弟をとりて幼少より丁稚たらしめば数年を出ずして銅臭の兒とならん君の議論は工商の子たるが故に気節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞ゆ君何が故か

ゝる貴族的の言語を吐くや君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す（明治二十四年十一月）とすこぶる激越な調子で書き送っている。

ここには、子規の一面をなす東洋的な豪快さに対して、漱石の、いわば市民的な進歩主義の側面がはっきりと対置されている。さきにみた羯南や子規の西洋文明論には、まだたしかに「和魂洋才」あるいは「東洋道德西洋芸術」といった、幕末洋学者以来の伝統的な觀念がつきまとっていた。漱石にも、その後にかけて、決してそれが無いわけではない。しかしかれの使命は、そこから一步を進めて、子規とともに確認したこの「東洋道德」や「和魂」を、いかにして、西洋の「道德」や「魂」と調和し得る普遍的な価値にまで高めてゆくかにあった。勤勉な実行家としての子規が、その後はひたすら俳句短歌の革新運動に没頭し、一步一步「額に汗たれて歩む歩兵」の營為を重ねてゆくのに對して、漱石はここに与えられた西洋と日本の問題を、あくまでも「思想」の問題として、あるいは英文学を対象とする学問の「方法」の問題として、必死にこれと取り組んでゆくのである。だがともかくかれにとっては、その後の自然主義作家たちのように、「外発的な開化」の路線にそのまま便乗することで、国民や伝統を切り捨てた、いわばレディ・メイドの抽象的な近代性の享受に甘んじてゆくことがもはや到底不可能であったのはいうまでもない。そしてしかも、右に述べたような二十年代のナシヨナリズムは、やがて子規らのもっていた寛容なインターナシヨナルな視点や、ひろい民衆的な基盤を喪失し、ようやくその偏狭な排外、復古、独善の色彩をあらわにしてゆくのであって、ここに西洋と日本ないしは東洋との問題を解決すべき現実の基礎は、急速に見失われてゆかねばならなかった。かくして漱石の苦渋は、この困難な問題を、もっぱらその孤独な思索と自己苛責とのうちに解決してゆかねばならぬ、というところに始まるのである。

卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり。余は此の不安の念を抱いて西の方松山に赴むき、一年にして、又西の方熊本にゆけり。熊本に住する事数年未だ此不安の念の消えぬうち倫敦に來れり。